

エッセイ

還暦を過ぎた旅と小さな出会い 第1回

NPO 法人「社会総合研究所」会員

桜井 良

こんにちは。私は桜井良という者です。「アラブ調査室」には、これまで書籍紹介「Return」（2021.2月）、「サブ添乗員のエジプト旅」（2021.7月）、「日本で初めての『アラブ語辞典』を発刊した川崎寅雄」（2021.8月）を掲載させていただきました。

今回は、「還暦を過ぎた旅と小さな出会い」というテーマで5回に分けて投稿させていただきます。60歳を過ぎてからの旅が主体ですが、「アラブ調査室」への投稿ですので、アラブやイスラームとの出会いについても少しは織り交ぜたいと思っています。しかし、私自身、アラブにもイスラームにも、そしてアラブを巡る最近の情勢についても門外漢です。掲載される記事の多くが学術的論文である「アラブ調査室」に投稿するのは気が引けるのですが……。ご容赦ください。

自己紹介

初めに自己紹介を。1947年生まれの団塊世代のトップバッターで75歳。家族は妻と高校生の双子の孫娘の4人で暮らしている。

宮城県の塩釜という漁港で幼年期から中学生まで過ごした。通っていた学校は高台にあり、校庭から松島湾や太平洋を望むことができた。あの水平線の彼方にはどんな国があるのだろうか？ どんな人々が住んでいるのだろうか？ 私もいつか、あの海の向こうに行ってみたいと空想しながら、見飽きることがなかった。童謡『海は広いな大きいな』に「行ってみたいな よその国」という歌詞があるが、私はこの空想を、一生持ち続けてきたように思う。

中学卒業後、仙台近郊にある宮城高専（現・仙台高専）の第一期

生として入学。1968年の二十歳の春、卒業して故郷を離れ、東京にあるイギリス系（その後アメリカ系）の外資メーカーX社に就職した。なぜ外資系にしたか？ 動機は単純。海外に行ってみたかったから。しかし、入社当初は仕事に興味を持たず、身が入らなかった。業務評価は、同期入社の子社員の中で私が最低だったと思う。これではいけないと思い直し、一念発起。翌年春、早稲田大学理工学部の夜間専門課程（当時）に入学した。仕事が終わってから通学し、生産管理、統計学、OR(Operations Research)などの経営数学、数理系のコンピュータ言語などを学んだ。このことが、後に品質管理の道へと進む基礎を作った。

また、もっと英語を習得したいという情熱が芽生え、1970年8月、会社から休暇を取り、UCLA(University of California at Los Angeles)で開催された1か月間のEnglish Summer Seminarに自費で参加した。このセミナーでは、後年、西ドイツ（当時）に渡って永住し、ヨーロッパを舞台に平和活動に人生を捧げたFさん(女性)、外務省に入省し、サウジアラビア大使などをつとめたEさんと知り合った。

X社は、私の仕事に対する姿勢の変化、勉学に対する意欲、成長を黙ってじっと見ていた。そして1971年秋、ヨーロッパに点在するイギリス系親会社の工場での生産管理研修に、私ひとりだけ推薦してくれたのである。ロンドン、パリ、デュッセルドルフ、フェンラユ(Venray オランダ)の工場に1か月間の研修に励んだ。こうした体験が、少年時代のたんなる空想から、視野を世界に大きく広げるきっかけを作った。

入社して40年後の2007年秋、私は60歳で定年退職した。定年後をどう生きるか、選択肢はいくつかあったが、基本的には世界を広く見てみたいという少年時代の空想を、そのまま行動に移したように思う。そのためには自由な時間が欲しい。そこでX社の再雇用やある協会から打診のあった品質管理コンサルタントの道へは進まなかった。しかし、ある程度の資金は必要である。そこで、私の趣

味を活かした自営業を営むことにした。

NPO 法人「社会総合研究所」における活動

これから「還暦を過ぎた旅と小さな出会い」を書くにあたり、NPO 法人「社会総合研究所」の活動にときどき言及することがあるので、初めに触れておきたい。

若い時代からの友人 O さんが、NPO 法人「社会総合研究所」の理事長をしていることは知っていた。社会総合研究所は、「一般市民、主にシニア世代を対象とし、市民相互の交流や情報交換を通じて生きがいの創造を支援するとともに、シニアの有する豊富な経験や知識・情報等を社会に還元し、もって世代を超えて共生する豊かで幸福な社会の実現に貢献することを目的」として、2006年8月、東京都からNPOとしての認証を得ている。私は定年直後の2007年12月、Oさんの勧めで会員となった。そして、2014年～2020年の6年間、会員のもつ経験・知識を一般社会へ還元する活動、および一般公開の講演会を担当する理事を務めた。もちろん、無報酬で。

私が理事として開催した講演会には、「イスラームを理解するために -相互理解と対話を目指して-」(2016年9月)塩尻和子氏(筑波大学名誉教授)、「首都直下地震にどうそなえるか」(2017年3月)平田直氏(東京大学地震研究所教授 地震予知研究センター長)、「難民問題を考える」(2018年3月)柳瀬房子氏(「AAR ジャパン難民を助ける会」会長)、「ドイツにおける移民/難民との共生」(2019年5月)錦田愛子氏(慶應義塾大学法学部政治学科准教授)、「葛飾北斎の作品鑑賞と版画美術の理解」(2019年9月)長谷川暢子氏(すみだ北斎美術館学芸員)、「歴史を変えた気象・災害」(2022年3月)田家康氏(気象予報士)などがある。

1. 東日本大震災のボランティア活動

定年後の旅は国内外さまざまあるが、すべては書けない。「アラブ調査室」の読者に興味をもってもらえそうな旅を書く。

最初の旅は、2011年3月11日に発生した東日本大震災から、ことし（2023年）3月で12年が経つ東北から始めたい。

私の生まれ故郷の松島、そして少年時代を過ごした塩釜も大きな被害を受けた。東北には宮城高専時代の旧友32名が住んでいる。大震災発生直後の1週間は、他の2人の級友と共に、ひとり一人の安否や被害状況の確認に忙殺された。電話やメールで確認できたのは三分の二。残りは手分けして現地に入り、全員の安否を確認できたのは3月末に近かった。幸い全員無事だったが、家屋に大きな被害があったのは4人、家族が犠牲になったのは2人。

交通事情が回復した6月から9月まで、4か月間に渡って断続的に被災地へボランティアに通った。宮城県の太平洋側南端の山元町から亘理町、仙台市若林区、七ヶ浜町、故郷の塩釜市と松島町、東松島市、石巻市、南三陸町、気仙沼市と北上しながら活動。岩手県では内陸の遠野市を拠点に7日滞在し、活動した。遠野市を扇の要とすれば、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市へ扇状に道路が通じ、アクセスがいいからだ。



2011年7月、仙台市若林区の体育館にて。地元のボランティア・メンバーと一緒に。私は前列左から2番目で帽子を被っている。

若林区は仙台市の東側に位置し、荒浜地区は犠牲者と被害が大きかった。被災者は体育館に避難し、仮設住宅が完成するまで数か月を過ごす。私は、地元のボランティア団体、食材を提供した方々と一緒に炊き出しをした。私の双子の孫娘（当時5歳）と同じ年齢の女の子が避難していたのを見て胸を痛めた。現在、荒浜小学校は震災遺構のひとつとして保存され、私は2017年9月に再訪した。

岩手県の遠野にて

ボランティア活動には思い出が多いが、一番楽しかったのは遠野に滞在した8月だ。

仮設住宅に寝泊まりするメンバーは男子16人、女子14人の計30人。夏休みのためか大学生が13人（男子7人、女子6人）もいた。60歳以上は私を含めて4人。最高齢は76歳、最年少はまだ童顔が残る18歳の女子大学生。大学生の美人姉妹と優しいお父さんという組み合わせの親子も参加した。微笑ましくもあり、ちょっぴり羨ましくもあった。私もいつの日か成長した双子を連れ、ボランティアに参加することがあるのだろうか？ メンバーは多士済々。物性物理学分野のM元教授、フラメンコ・ダンサーのKさん、大学のゼミ生4人を引き連れたI講師、ウズベキスタン留学から戻ったばかりのTさん、などなど。女子マラソンで3時間30分を切るEさんは、3月11日は仕事先の丸の内から自宅の横須賀まで、約50Kmを走って帰宅したという。ビックリ仰天!!

朝、仮設住宅で簡単な朝食を済ませ、作業着に着替え、近くの高校の体育館へ行く。そこは、倉敷・津・静岡など全国からのボランティア総勢100人の拠点となっていて、ボランティア活動の責任者

から、きょうの計画や注意事項などを聞く。2日目の朝、ふと隣を見ると、外国からの参加と思われる50歳代のメンバー8人が座っていた。責任者の説明を理解できない表情をしている。事情を尋ねると、日本語の分かる同行者が、他の打ち合わせで席を外しているとのこと。そこで私は、拙い通訳を買って出た。後で聞くと、アメリカ南部のルイジアナからヒューストン、シアトル経由で成田へ着き、そのまま東北新幹線とバスを使って遠野に来たという。岩手県までボランティアに来た動機を尋ねると、キリスト教福音派のボランティア団体の方々に、テレビで津波による被災を知り、なんとか力になりたいと遠路はるばる来たという。なんという健気さだ。彼らとの活動場所が別々だったので、その後、話をする機会は失われた。

一日の活動が終わると遠野に戻り、シャワーで汗と泥を落とし、親しくなったメンバーと三々五々、街に飲みに行くのも楽しい。遠野は、「ドブ洛克特区」だ。

遠野駅前の居酒屋で一日の疲れを癒す。男も女も、みな、日焼けした顔。



宮城県の七ヶ浜町にて

七ヶ浜町は塩釜市の東に位置する。名前が示すように、太平洋に面する七つの浜からなる町だ。七つの浜のひとつ菖蒲田浜（しょうぶたはま）には、思い出がある。

私が中学一年の9月、東北大学教育学部四年生の女子学生Kさん

が、私のクラス担当の教育実習生として1か月間、赴任してきた。彼女の父は塩釜警察署の署長で塩釜に住んでいた。スラリと背が高く、表情豊かで知的な顔をしていたので、若い独身の男性教師はみな、Kさんに魅かれたと思う。実習期間中、私はKさんの授業が待ち遠しく、いつもより熱心に聞いた。授業内容が楽しかったというより、Kさんが魅力的だったから。気に入られようと積極的に授業に取り組んだ。そんな訳ですぐ親しくなった。

ある日、当時は半ドンだった土曜日の授業が終わると、Kさんに日曜日をどう過ごしたかを葉書に書き、月曜日に投函しますと話した。しかし、そう言うっておきながら、私はそのことをすっかり忘れてしまった。同じ市内なので、もし月曜日朝に投函すれば翌火曜日には届く。水曜日の朝の教室で、Kさんは私からの葉書を楽しみにしていたが、火曜日に届いていなかったと言った。私は赤面したと思う。帰宅してから慌てて葉書を書き、投函した。数日後、Kさんからきれいな文字で書かれた返事が来た。他愛無いエピソードであるが、私にとっては好きな女性から初めてもらった葉書である。

9月下旬となって教育実習も最終日となり、実習成果を問う授業が行われた。教室の後方には、Kさんの成果を評価する先生方が数人並び、彼女だけでなく、授業を受ける生徒も緊張していた。そのためか、授業がなかなか活発にならない。質問されてもみな、こわばって挙手しない。彼女は相当焦ったと思う。そこで私は機転を利かせ、誰もが質問に沈黙する中、積極的に手を挙げて回答したり、大きな声で返事したりと、授業を盛り上げようとした。こうした行為は、私には珍しい、ふだんは見せない授業態度である。たぶん、気に入られようという気持ちが勝っていたのだと思う。授業終了後、Kさんからそっと廊下に呼ばれ、小声で「桜井君にはずいぶん助けられた。ありがとう」と感謝された。嬉しかった。翌日、彼女は教育実習を終え、東北大学に戻った。

10月に入り、秋の遠足が七ヶ浜町とわかったとき、私はKさんに一緒に行きませんかと葉書を出した。気持ちよく応じてくれた。秋

日和の空の下、菖蒲田浜までの埃っぽい道を歩きながら、彼女は中学生だった頃の思い出、大学での勉学のことなどを話してくれた。そして、浜辺での昼食、ボール遊びなどで一緒に遊んだ。

そんな遠い懐かしい記憶のある菖蒲田浜の海岸清掃に出かけたのは、大震災の翌年の2012年5月だった。現地の青年達から、被災者を元気つけるため、被災地としてどの市町村よりも最初に花火大会を開催すると聞き、会場となる瓦礫にまみれた砂浜を清掃する必要があるからだ。町の支援センターに入ると、壁に大きなキャンパス地の布が掲げられており、何だろうと近寄って見てみると、それはNZ(ニュージーランド)南島のクライストチャーチの高校生による寄せ書きだった。寄せ書きには、カンタベリー地震に対する日本からの支援への御礼や被災者を励ます言葉などが、英語で並んでいた。NZも日本も地震国である。特に南島は、2010年秋と2011年2月に大地震に見舞われた。その際、日本から多くの支援物資が届けられ、医療などの分野でボランティアが駆け付けた。その返礼として、2011年12月、クライストチャーチの高校生25名が、クリスマス休暇を利用してセケ浜町をボランティアで訪れ、寄せ書きしたのだった。

この寄せ書きを見て、私は、いつかNZに行ってみたい、Garden Cityといわれるクライストチャーチに行ってみたいという気持ちになった。その願いを叶えたのは、2年後の2014年12月末。南半球は夏のクリスマス。私は双子の孫娘(当時、小学3年生)の冬休みを利用して、北島・南島を巡り、途中、クライストチャーチにも寄った。



「閑上（ゆりあげ）の記憶」

さて、私の宮城高専時代からの親友 A 君（埼玉県東松山市在住）について書いておきたい。彼の実家は名取市閑上（ゆりあげ）だ。貞山（ていざん）堀や名取川の穏やかな風景に囲まれた漁港である。A 君の姉夫婦や多くの親戚は閑上に住んでいた。そして 90 歳の彼の母は、閑上の特別養護老人ホーム「うらやす」に入居していた。「うらやす」も津波に襲われ、ほぼ全壊したが、施設長の的確な避難指示と誘導で十数人が屋上に避難。約 50 時間後、自衛隊に救助された。これは新聞でも大きく報道された。しかし、献身的に母の世話をしてきた姉夫婦は津波にさらわれ、1 週間後、ふたりとも遺体で発見された。また、小中学校時代の多くの幼友達も失った。



閑上の消失した実家近くで、亡くなった姉夫婦や友人に手を合わせる A 君。四角い石がいくつか見えるが、これは倒壊し、流された墓石群。

そんな事情もあり、私は A 君と一緒に何度か閑上へ通った。旧・閑上中学校の体育館に集められた膨大な量の泥だらけの遺品・・・ランドセル、位牌、アルバム、衣類など・・・の中から、彼の家族の遺品を探した。廃屋になった「うらやす」に忍び込み、彼の母の品々を探したりもした。漁港すぐ傍の日和山（ひよりやま）で執り行われた慰霊祭にも足を運んだ。そんな活動の中で、精神科医の桑山紀彦医師と知り合った。

桑山医師は、被災者が負った PTSD(心的外傷後ストレス)のケアのために閑上に留まり、震災の語り部となった被災者と一緒に 2012 年春、津波復興祈念資料館「閑上の記憶」を立ち上げた。これまで 12 万人を越える方々が訪問したと聞く。彼については、本エッセイの第 4 回「9. 海老名市と地球のステージ共催の市民講座『イスラームを知ろう』」で詳述する。

ボランティア活動が一段落した 2013 年 3 月、私は、社会総合研究所の講演会として「東日本大震災と福島原発事故からの復興の現状と課題」(三浦隆利氏 東北大学名誉教授)を東京・上野の東京文化会館で開催した。三浦氏は、私の宮城高専時代の級友で、卒業後は東北大学に編入学し、熱工学・燃焼工学・エネルギー工学の専門家となり、教授となった。

2. 初めてのムスリムとの出会い

私が初めてムスリムと言葉を交わしたのは、定年を 5 年ばかり過ぎた 65 歳頃だ。それまでは、街で見かけることはあっても話をしたことはなかった。

小田急線の車内で出会ったマレーシア人

2013 年 5 月の連休のある日、双子の孫娘(当時、小学 2 年生)にせがまれて、小田原城に行くことにした。小田急線の海老名駅から急行に乗り込むと、長座席にヒジャブ(頭髪を覆い隠すスカーフ)を被った 4 人の若い女性が座っていて、その隣に数人分の空きがあった。その空き席に私たち 3 人で座り、あらためて周囲を見渡すとほぼ満席で、しかも吊革につかまっている乗客もいる。つまり、私たちが座るずっと前から、その長座席の半分は空席だったのだ。なぜ? ヒジャブを被った人々の隣りだったから?

小田原までの間、私は興味を持ってヒジャブを被った女性たちに話しかけた。彼女たちはマレーシアの医学生で、都内の病院へ 1 か月の研修に来たという。研修を終え、明日はいよいよ離日するので、

その前に富士山を観たくて箱根へ行くというではないか。私は、彼女たちが広げた地図を使って交通手段や経路、箱根の見どころを話し、帰国後の仕事などを質問した。その間、近くの乗客は、遠巻きにしたまま、ちらりちらりと私たちに視線を投げかける。こうした乗客の態度は、たぶん日本人のムスリムに対する態度、すなわちよく分からない宗教の信者に対する態度を代弁しているのであろう。彼女たちとは、小田原駅で箱根登山鉄道の乗り場まで案内して別れた。後になって、彼女たちを箱根のあちこちに案内すればよかったと後悔した。

小田急線車内で出会ったマレーシアからの医学生。



ムスリムと接点をもたない大多数の日本人は、ヒジャブを身に付けているだけで警戒してしまう。異なる宗教、国籍、人種への偏見を持ってしまう。

しかし、私にも偏見はあった。思い出すのはX社で仕事をしていて40歳後半の出来事だ。30年近く前になる。アメリカの親企業から、品質管理の活用について学ぶために一人のインド系アメリカ人が来た。初日の午前、研修日程の打ち合わせが終わり、ランチに招待したが断られた。理由を聞くと、ヒンドゥー教のある宗派に属し、根菜しか食べないからだと言う。宗教によって食べ物に対する禁忌があることはおぼろげながら知っていたが、初めての遭遇だった。

どう対応すれば分からなかった。それではホテルや食事はどうするのか？ そう質問すると、横浜に 1 軒だけ対応してくれるホテルがあり、そこで朝食・夕食を取ることができるそうだ。そして彼は、10 日間の研修が終わるまで、ランチはいつもピーナッツしか食べなかった。滞在中、根菜だけの食事を貫き通した彼に対し、世の中は美味しいものに溢れているのに、なぜ食べない？ といつも不思議だった。

近所の T 医院にて

海老名市とその近郊には、多くのムスリムが住んでいる。相模川左岸の三川（さんせん）公園近くには、小さな礼拝堂「海老名 Masjid」があり、金曜日にはムスリムが大勢集まって来る。屋台もいくつが出るとスライスしたケバブと野菜と一緒にパンにはさんでもらい、家族の人数分を買って帰る。親しくなると、屋台の主人は、トルコから日本に来て、奥さんは沖縄出身だと、聞いていないことまで話してくれる。

私は年齢相応に軽い高血圧だ。2 か月に 1 度、降圧剤を処方してもらうための診察で近所の T 医院へ行く。T 医師は、40 年近く私たち家族の「かかりつけ医」で、近隣から信頼され、慕われている。

2014 年春の出来事。T 医院へ行くと、待合室でムスリム家族と出会った。ご主人と奥様と小さな息子さんの 3 人連れ。ご主人は見事な髭をたくわえ、奥様はアバヤ（目と手以外を隠す黒い衣装）を身に付けていたので、ムスリムとすぐ分かる。案の定、他の数人の患者さんは遠巻きにして椅子に座わり、順番待ち。私は診療までの待ち時間を持て余し、思い切って話しかけてみた。息子さんが風邪をひいたので連れてきたという。聞くところによれば、アフガニスタン出身で南ア連邦の大学に留学した。しかし、希望の仕事に就けず、アメリカに渡った後、2 年前に来日して隣町の綾瀬市に住んでいる。現在は、米軍の厚木基地近くのアメリカン・スクールで IT 関連の授

業を持っているそうだ。それにしても、なぜ綾瀬市から離れている T 医院へ？ 不思議に思い尋ねると、近郊に英語を話す医者がほとんどいないが、T 医者は英語を話し、また親身になって病気を看てくれ、健康相談にも乗ってくれるので、それが SNS などでムスリムの間に広がったそうだ。

T 医院では、その後、スリランカ・インドネシア・トルコからの移民家族とよく会った。

(次回号に続く)